

グリーンな栽培 マニュアル

グリーンな栽培マニュアルの特徴について

◆概要

——慣行栽培と比較して——

このマニュアルは、化学農薬・プラスチック被覆肥料の使用低減及び省力化を実現しつつ、慣行以上の収量・品質を目指すためのものである。

慣行栽培と異なる部分は主に以下の3つである。

- ペースト2段施肥技術の活用（高密度播種育苗栽培）
- 化学農薬の削減に向けた成分数の少ない農薬及び微生物防除剤等の活用
- スタブルカルチを活用した秋起こしの省力化

浸種・種子消毒・催芽

この工程は、播種後の苗立ちを揃え、健全な苗を育成するために必要不可欠なものである。

(それぞれの詳細は次ページより)



【終了の目安】
籾殻の上から胚が白く透けて見えるようになった頃

**タフブロックを
催芽時処理!!**

タフブロック (微生物防除剤) で防除可能なもの

種子伝染性病害
(テグリードCなどで防ぐ病害)
ばか苗病
いもち病
もみ枯細菌病
苗立枯細菌病
褐条病

苗立枯性病害
(ダコニールなどで防ぐ病害)
リゾプス
フザリウム
トリコデルマ

**テグリードCフロアブル (2成分)
クマイダコニール1000 (1成分)
合計3成分の削減可能!!**

1. 浸種について

【表】 浸種期間の目安

品 種	15℃	10℃
全品種共通	7日以上	10日以上

(積算温度目標100℃以上)

① 浸種1日目（24時間）の水温を10～15℃に保つ

(催芽ポンプ等を利用)

低水温で浸種を開始すると、浸種期間中の水温が10℃以上になっても、発芽率の低下やバラツキにより、苗の生育にも影響します。

② 浸種時の水替えは、こまめに行う

(最初は2日に1回、以降は毎日)。

浸種時に雑菌が入ると、次のステップの種子消毒剤（タフブロック）の効果が無くなるのできれいな水道水を使いましょう。

③ 特に3～4月は気温が低いので催芽器やビニールハウス、毛布を活用し保温に努める。

日中10℃以上でも放射冷却により最低気温が1℃を下回る日が度々訪れるので注意する。

浸種の目的は、**粃ごとの吸水量を揃えること、粃から放出される発芽阻害物質を除去することにあるので、なるべく低温（10～11℃程度）でゆっくり行うことが望ましい**

2. 種子消毒について

3~4月

用途	農薬名	使用時期	使用量
種子消毒	タフブロック	催芽時	200倍 24時間浸漬

200倍液の作り方		種別の目安
水量	タフブロックの量	
10L	50g	5kg
20L	100g	10kg
40L	200g	20kg
60L	300g	30kg
80L	400g	40kg
100L	500g	50kg

3. 催芽について

【表】 催芽の目安

催芽適温	催芽程度	催芽期間	注意事項
30℃	1~2mm (ハトむね程度)	1.6~2.0日	伸ばしすぎると根や芽の先が折れたりして、出芽ムラの原因となる。

- ① 30℃以上で催芽を行うと、細菌性病害の発生が懸念されるため注意する。
- ② 高密度播種苗は、播種から移植までの期間が短く、苗丈の確保が難しいため、催芽が斉一になるよう慣行栽培よりも浸種・催芽に留意する。

1. 播種

育苗箱に高密度に播種して苗を育成

慣行苗：乾籾 100～120 g/箱

密苗：乾籾 250～300 g/箱



(左) 100 g/箱



(右) 300 g/箱

2. 育苗管理

① 移植時の 目標葉齢は2.0～2.3葉、育苗日数は播種後15～20日とする。

慣行苗（3週苗）

草丈：12～14 cm

葉齢：2.2～2.5L



密苗（2週苗）

草丈：10～12 cm

葉齢：2.0L



H26 石川農試

ポイント

慣行苗よりも限られた時間で根張りを確保すること！！
播種量が多いので2葉期で生育が停滞し、老化苗となる

② 出芽温度は30～32℃の慣行育苗に準じた温度設定とし、出芽日数についても慣行に準ずるかまたは半日程度延長し十分に出芽させる。

③ 苗丈確保のため第1鞘高長の伸長を促すよう、必要に応じて緑化期の被覆期間を1～2日長くする（第1鞘高長 目標4～5cm）。

このとき、苗を焼かないようハウス内温度に留意する。

④ 育苗時の温度管理は慣行に準じるが、根張りを確保するためハウス内温度の確保に努めましょう。

1. 移植作業

- ①移植作業は、ペースト施肥機（2段施肥仕様）を装着した専用の田植機を使用して行う。
- ②ペースト肥料は右上図のように適宜補給する。
- ③栽植密度は、**60株/坪以上**とする。
- ④除草剤については慣行栽培に準ずる。

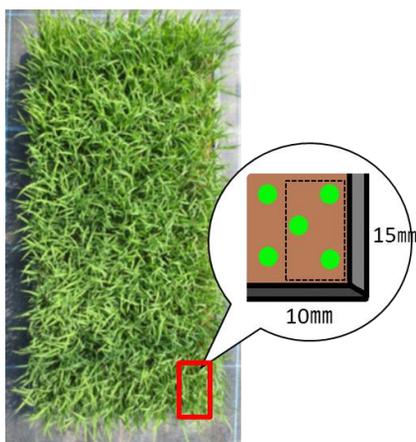


図 田植え機（例）
ヤンマーYR8D
左上：ペースト肥料
補給の様子

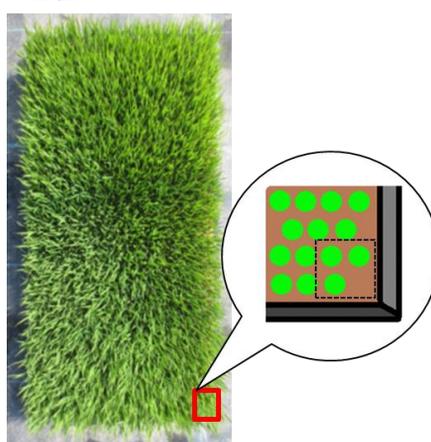
2. 移植時期

- ①気象が安定しない4月下旬の移植は避ける。

慣行苗



密苗



移植時の掻き取り面積は、慣行苗と比較して少ない



慣行苗よりも根土が少なく、移植後に正立姿勢の保持が不安定になりやすい

ポイント

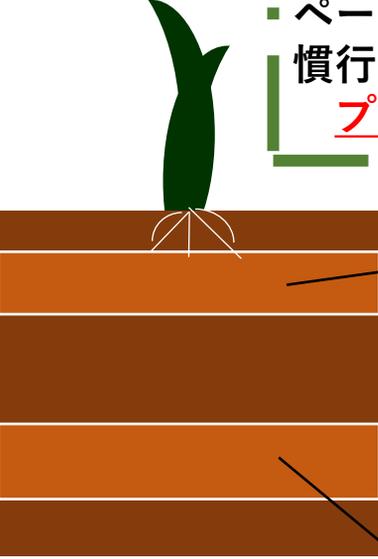
欠株にならないように慣行苗以上に土壌硬度や水深に留意する！！

- ②移植時の理想的な土壌硬度は、ゴルフボールを1mの高さから落下させた場合、ボールが田面から1/3程度沈む位を目安とするため、計画的な荒起こし、代かき作業を行っておく。
- ③移植時の**水深は、落水～ひたひた水とする（水深が深いと浮苗になるのでだめ）**。なお、強風時の移植は倒れ苗や浮苗になりやすいのでなるべく実施を避ける。
- ④移植時に下記の苗箱施薬剤の何れかを散布する（紋枯病の常発地を除く）。

苗箱施薬剤名	施用量(10a当たり)	成分数
スタウトダントツ箱粒剤08	1 kg	2
ブイゲットバリアード粒剤	1 kg	2
ヨーバルトップ箱粒剤	1 kg	2

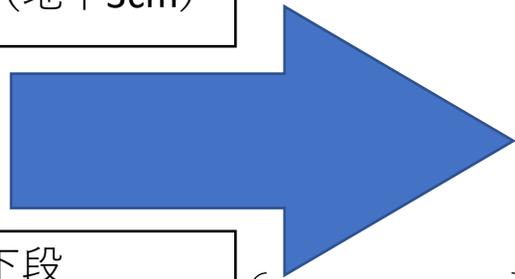
肥料

ペースト肥料を2段に分けることで、
慣行の基肥一発体系の肥効を実現する
プラスチック被覆肥料からの脱却



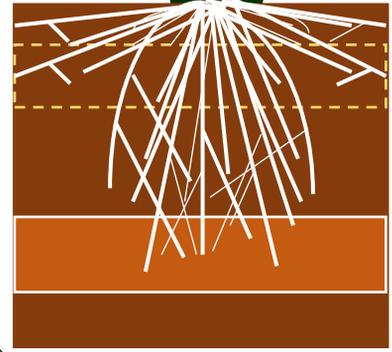
上段
(地中3cm)

(3、5、7cm
から選択可能)



下段
(地中15cm)

(9、12、15cm
から選択可能)



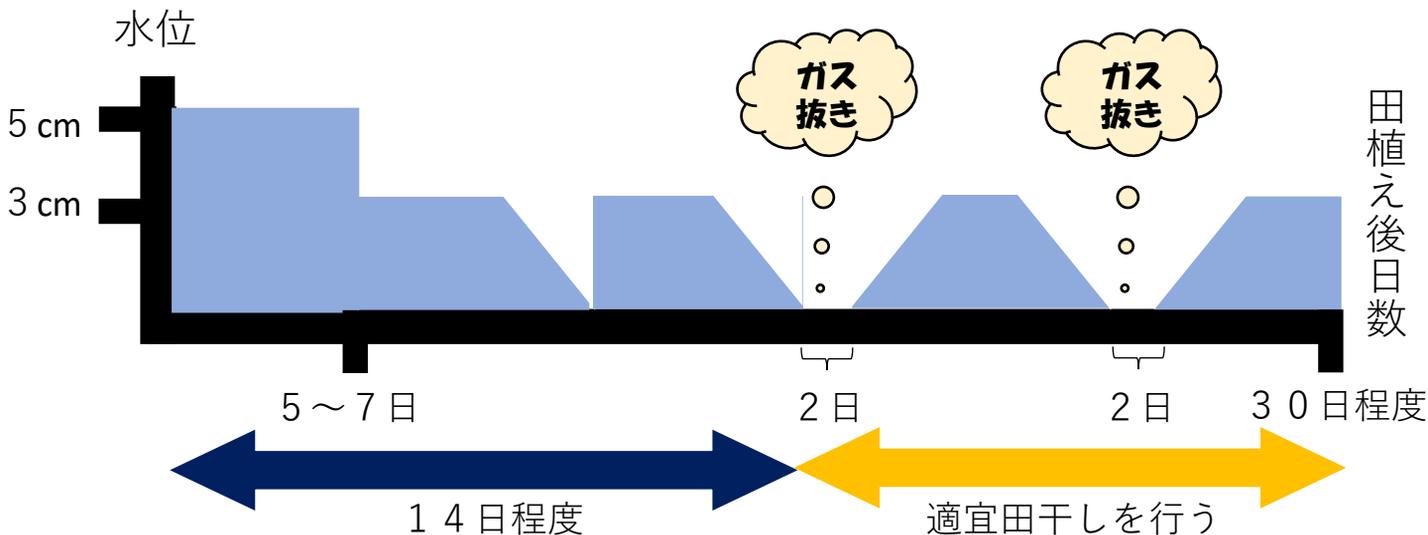
生育初期
上段の肥料を吸収

生育中期～
下段の肥料を吸収

地区	品種	肥料名	合計施肥量 (10a当たり)	上/下	施肥量
内浦	能登ひかり	ネオペースト SR502	50	上	20
				下	30
	ひやくまん穀		65	上	26
				下	39
カグラモチ	40		上	16	
			下	24	
コシヒカリ	40		上	16	
			下	24	
町野	能登ひかり		50	上	20
				下	30
	ゆめみづほ		50	上	20
				下	30
ひやくまん穀	55	上	22		
		下	33		
コシヒカリ	35	上	14		
		下	21		
門前	つきあかり	65	上	26	
			下	39	
	ひやくまん穀	65	上	26	
下			39		
コシヒカリ	45	上	18		
		下	27		

ペースト2段施肥は、根の生育に合わせて肥効が発現するため、根腐れを起こすような水管理は行わないこと
肥効のスリや倒伏による減収に繋がります！

1. 生育初期の水管理（早期優良茎の確保）



2. 中干しの適期実施（適正穂数への誘導）

60株/坪植えの場合

品種	中干し開始目安 茎数 (本/株)	中干し終了目安 幼穂形成期 (月日)	目標穂数 (本/株)
ゆめみづほ	16本	6月30日	24本
能登ひかり	15本	6月30日	21本
つきあかり	13本	6月30日	19本
コシヒカリ	14本	7月10日	20本
カグラモチ	12本	7月10日	18本
ひやくまん穀	13本	7月15日	19本

早い



10本

中干し開始の適期



13～16本

遅い

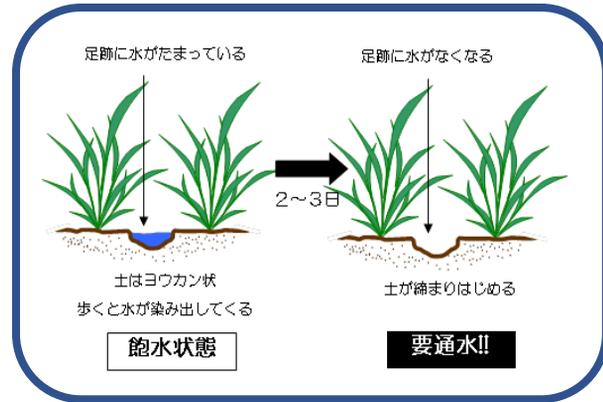
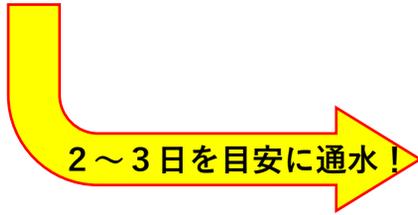


18本

3. 幼穂形成期以降の飽水管理

7月以降

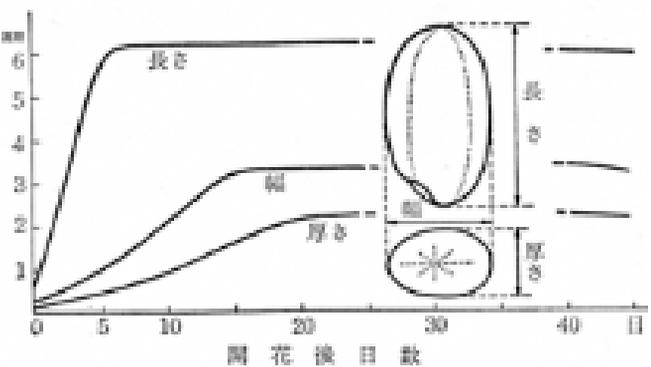
- ①幼穂形成期以降は、根の活力維持のため、水と酸素の両方が必要となる。



- ②入水は、水温が低い朝方か夕方に行い、高温による稲体の消耗を抑える
- ③フェーン現象（台風に伴う高温）が予想される場合は、事前に湛水しておく
- ④飽水管理は、粒張りを良くするため、刈取り7日前まで行う

玄米は開花後、約5日で長さ、約14日で幅、約20日で厚さが決まります。

特に「厚さ」については、最も遅く成熟期近くまで影響を受けます。



1. 随時防除

①環境保全の観点から、苗箱施薬剤の農薬成分数を2に抑えているので、紋枯病に有効な成分が含まれていない。



紋枯病の常発地は、下記のとおり防除を行うことで対応する

薬剤名	施用量 (10a当たり)	散布時期	備考
モンセレン粉剤DL	3~4 kg	出穂3~4週間前	—
または			
モンガリット粒剤	3~4 kg	出穂2~3週間前	散布後3~4日間湛水

2. 本田防除 (ドローン防除)

	薬剤名	成分数	原液散布量 (10a当たり)	希釈倍率	散布時期
1	ビームエイトトレボンゾル	2	160mL	5倍	出穂直前
	バリダシンエアー	0	100mL	8倍	
2	キラップフロアブル	1	100mL	8倍	出穂1週間後
3	キラップフロアブル	1	100mL	8倍	出穂2週間後

バリダシンエアーは微生物由来の農薬のため、成分数は0である

バリダシンエアーは、グリサポ事業での実証の結果、慣行のモンセレンフロアブルと同程度となった。

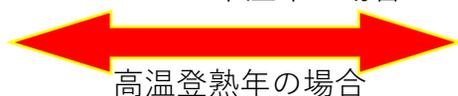
1. 適期の刈取

粳の黄化程度 30% 1/3程度黄化	50% 1/2程度黄化	65% 2/3程度黄化	80%	85%	90%	95%
刈取り適期まで 15~13 日前	11~9 日前	7~5 日前	3~2 日前	適期		遅れ

①刈取適期は、上表に基づき、必ず粳黄化率から判断する。



高温登熟年の場合



②ほ場にクサネムの発生が見られた場合、収穫前に必ず抜き取りを行う。



2. 適切な乾燥

①収穫後は、ヤケ米を防ぐため、4時間以内に乾燥機に張り込む。

②胴割粒を防ぐため、高温による急激な乾燥は行わない。



乾燥中の粳の温度は、35~40℃以下で、乾減率0.8~1.0%/時程度とします。

③水分ムラ、余熱乾燥・戻り乾燥に留意する。



水分ムラの対応は2段乾燥法（水分18%程度で乾燥機を止め、1昼夜調湿した後、仕上げ乾燥する方法）を実施しましょう。

3. 粳摺り作業

①もみ混入、肌ずれ粒発生防止のため、粳摺り機のロールの幅を1/2を標準として粳摺りを実施する。また、ロールの調整は入念に行う。

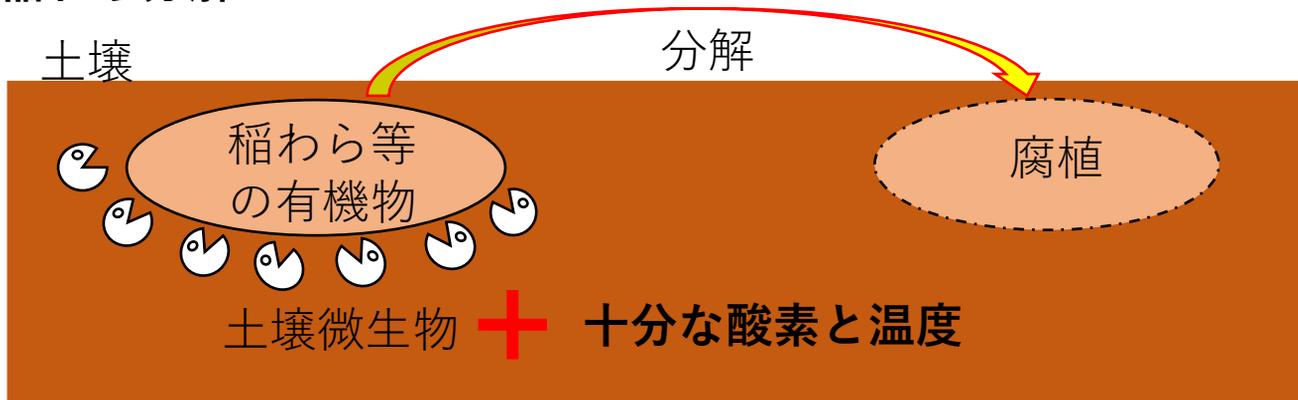
4. 調製作業

①ひやくまん穀は1.90mm以上、その他の品種は、1.85mm以上の網を用いて調製を行う。

目的

稲わらのすき込みによる有機物の補給
翌年のガス湧きの防止
難防除雑草（クログワイ、オモダカ）の枯殺

稲わら分解のメカニズム



稲わら等の有機物は、土壌微生物によって分解されるため、土壌微生物の活性を高めることが秋起こしのポイントとなる

ポイント

湛水状態にしない！
気温が高い時期に秋起こしを行う！

1. 水尻の解放（水稻収穫後は常時）

- ①ほ場を乾かすため、秋起こし前から水稻収穫後は水尻を解放し、必要に応じて溝掘りを行う。

2. スタブルカルチによる秋起こしの実施

- ①ロータリーより省力効果があるため、スタブルカルチで実施する。

スタブルカルチによる秋起こし：約 8 分/10a
（比較：ロータリーの場合：約 25 分/10a）

- ②気温が高い 10 月中に実施する。



グリーンな栽培暦(つきあかり)

1. グリーンな栽培暦の特性

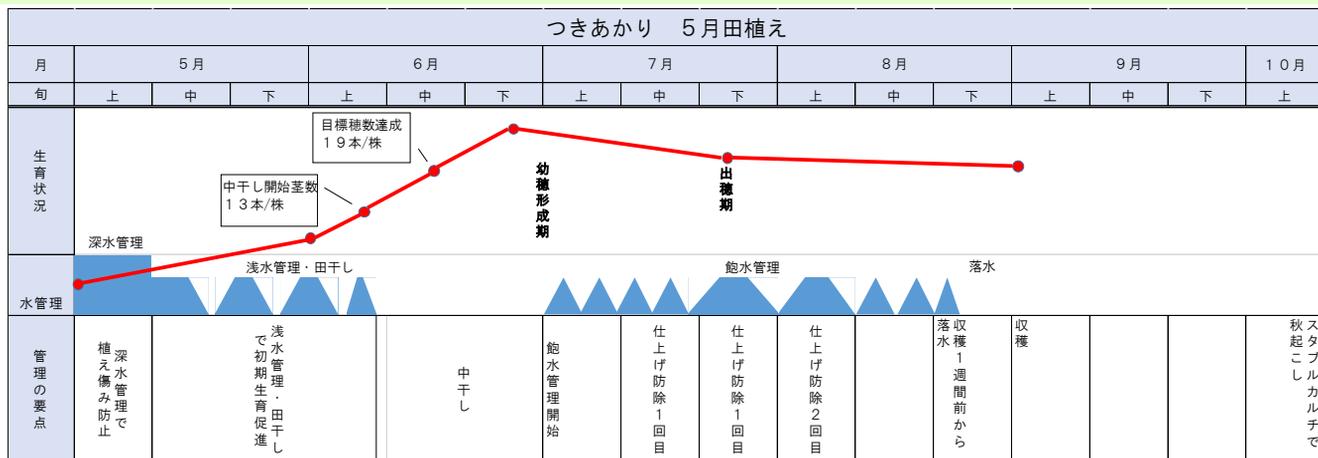
○特性概要

———慣行栽培との比較———

- ◆ペースト 2 段施肥技術の活用 (高密度播種育苗栽培)
- ◆化学農薬の削減に向けた成分数の少ない農薬及び微生物防除剤等の活用
- ◆スタブルカルチを活用した秋起こしの省力化

○目標収量

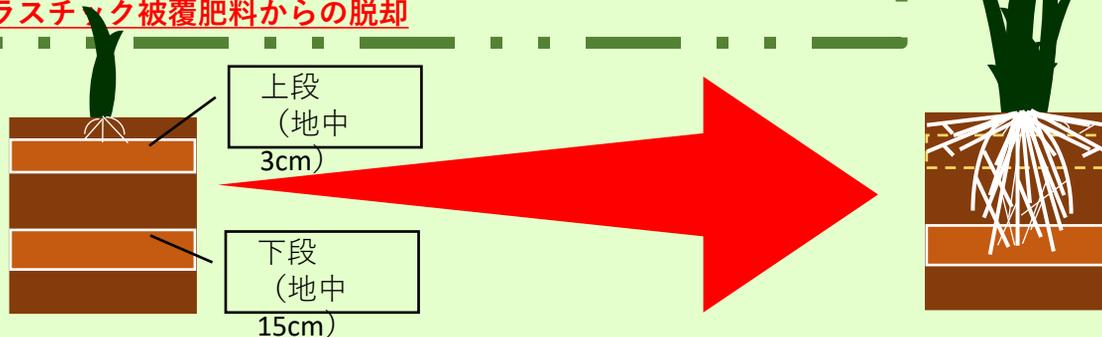
精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	総粒数 (粒/m ²)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)
600	340	88	30,000	84	24.0



2. 施肥体系(ペースト2段施肥)

ペースト肥料を2段に分けることで、慣行の基肥一発体系の肥効を実現する

プラスチック被覆肥料からの脱却



(単位:kg/10a)

肥料名	地区	上段(地中3cm)	下段(地中15cm)
ネオペースト SR502	門前	26	39

土づくり

省力化のため、スタブルカルチでの秋耕を行う

3. 防除体系

基幹防除

用途		農薬名	使用時期	使用量
種子消毒		タフブロック	催芽時	200倍・24時間浸漬
育苗消毒				
苗箱施薬		スタウトダントツ箱粒剤08	田植当日	1kg/10a
		ブイゲットバリアード粒剤		
		ヨーバルトップ箱粒剤		
本田除草	※慣行コシヒカリに準じる			
畦畔除草				
仕上げ防除 (ドローン)	第1回	ピームエイトレボンゾル	出穂直前(収穫21日前まで)	5倍・800mL/10a
		バリダシンエアー		8倍・800mL/10a
	第2回	キラップフロアブル	出穂7～10日後(収穫14日前まで)	8倍・800mL/10a
	第3回	キラップフロアブル	出穂14～17日前(収穫14日前まで)	8倍・800mL/10a

随時防除【常発地では散布】

対象病害虫	農薬名	使用時期	使用量
紋枯病	モンセレン粉剤DL	出穂3～4週間前	3～4kg/10a
	モンガリット粒剤	出穂2～3週間前(散布後3～4日湛水)	3～4kg/10a

- 登録農薬以外は使用しない
- 安全使用基準の遵守
- 栽培履歴記録簿の記載
- 農薬使用時は必ずラベルを確認

4. 栽培の注意事項

1 播種量	播種量は 乾粃250～300g/箱		
	説明	密苗のため、播種量に注意してください。	
2 田植え時期	田植え時期は 5月		
	説明	田植え直後の植え傷み防止のため、天候の安定しない4月の田植えは止めましょう。	
3 栽植密度	栽植密度は 60株/坪以上		
	説明	能登地域は、初期生育が確保しにくいいため、栽植密度を増やすことでカバーしましょう。	
4 水管理	適期中干しの実施		
	説明	倒伏防止のため、必ず実施しましょう。	
5 病虫害防除	斑点米カメムシ に注意！		
	説明	大型で飛翔性のカメムシが増加しています。斑点米発生防止のため、出穂後2回の防除を行いましょう。	
6 収穫時期	収穫は 粃黄化率(80%以上) にて判断【高温登熟年の場合】		
	説明	群落の葉色で判断せず、ほ場内で粃の色を確認してから収穫しましょう。	
7 調製	調製網目幅は 1.85mm以上		
	説明	品質向上のため、調製網目幅は守りましょう。	
8 土づくり	スタブルカルチによる秋起こし を実施(10月中)		
	説明	収穫後気温が高いうちに秋起こしを実施し、稲わらの腐熟促進をしましょう。	



ペースト2段施肥



大型で飛翔性のクモヘリカメムシ



スタブルカルチによる秋起こし

グリーンな栽培暦(コシヒカリ)

1. グリーンな栽培暦の特性

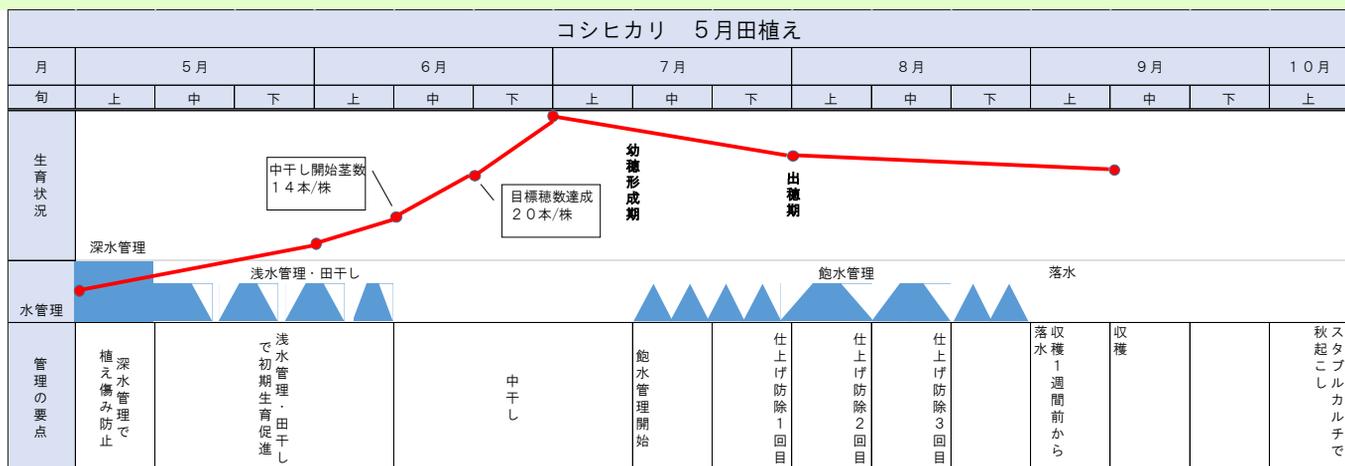
○特性概要

———慣行栽培との比較———

- ◆ペースト 2 段施肥技術の活用 (高密度播種育苗栽培)
- ◆化学農薬の削減に向けた成分数の少ない農薬及び微生物防除剤等の活用
- ◆スタブルカルチを活用した秋起こしの省力化

○目標収量

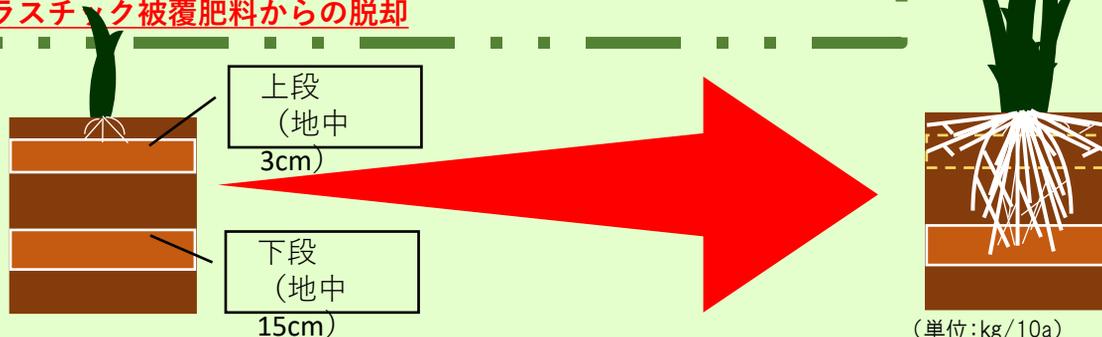
精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	総粒数 (粒/m ²)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)
480	360	73	26,300	85	21.5



2. 施肥体系(ペースト2段施肥)

ペースト肥料を2段に分けることで、慣行の基肥一発体系の肥効を実現する

プラスチック被覆肥料からの脱却



(単位: kg/10a)

肥料名	地区	上段(地中3cm)	下段(地中15cm)
ネオペースト SR502	内浦	16	24
	町野	14	21
	門前	18	27

土づくり

省力化のため、スタブルカルチでの秋耕を行う

3. 防除体系

基幹防除

用途		農薬名	使用時期	使用量
種子消毒		タフブロック	催芽時	200倍・24時間浸漬
育苗消毒				
苗箱施薬		スタウトダントツ箱粒剤08	田植当日	1kg/10a
		ブイゲットバリアード粒剤		
		ヨーバルトップ箱粒剤		
本田除草	※慣行コシヒカリに準じる			
畦畔除草				
仕上げ防除 (ドローン)	第1回	ピームエイトレボンゾル	出穂直前(収穫21日前まで)	5倍・800mL/10a
		バリダシンエアー		8倍・800mL/10a
	第2回	キラップフロアブル	出穂7～10日後(収穫14日前まで)	8倍・800mL/10a
	第3回	キラップフロアブル	出穂14～17日前(収穫14日前まで)	8倍・800mL/10a

随時防除【常発地では散布】

対象病害虫	農薬名	使用時期	使用量
紋枯病	モンセレン粉剤DL	出穂3～4週間前	3～4kg/10a
	モンガリット粒剤	出穂2～3週間前(散布後3～4日湛水)	3～4kg/10a

- 登録農薬以外は使用しない
- 安全使用基準の遵守
- 栽培履歴記録簿の記載
- 農薬使用時は必ずラベルを確認

4. 栽培の注意事項

1 播種量	播種量は 乾粃250～300g/箱		
	説明	密苗のため、播種量に注意してください。	
2 田植え時期	田植え時期は 5月		
	説明	田植え直後の植え傷み防止のため、天候の安定しない4月の田植えは止めましょう。	
3 栽植密度	栽植密度は 60株/坪以上		
	説明	能登地域は、初期生育が確保しにくいいため、栽植密度を増やすことでカバーしましょう。	
4 水管理	適期中干しの実施		
	説明	倒伏防止のため、必ず実施しましょう。	
5 病虫害防除	斑点米カメムシ に注意！		
	説明	大型で飛翔性のカメムシが増加しています。斑点米発生防止のため、出穂後2回の防除を行いましょう。	
6 収穫時期	収穫は 粃黄化率(80%以上) にて判断【高温登熟年の場合】		
	説明	群落の葉色で判断せず、ほ場内で粃の色を確認してから収穫しましょう。	
7 調製	調製網目幅は 1.85mm以上		
	説明	品質向上のため、調製網目幅は守りましょう。	
8 土づくり	スタブルカルチによる秋起こし を実施(10月中)		
	説明	収穫後気温が高いうちに秋起こしを実施し、稲わらの腐熟促進をしましょう。	



ペースト2段施肥



大型で飛翔性のクモヘリカメムシ



スタブルカルチによる秋起こし

グリーンな栽培暦(カグラモチ)

1. グリーンな栽培暦の特性

○特性概要

———慣行栽培との比較———

- ◆ペースト 2 段施肥技術の活用 (高密度播種育苗栽培)
- ◆化学農薬の削減に向けた成分数の少ない農薬及び微生物防除剤等の活用
- ◆スタブルカルチを活用した秋起こしの省力化

○目標収量

精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	総粒数 (粒/m ²)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)
480	320	86	27,500	85	21.0

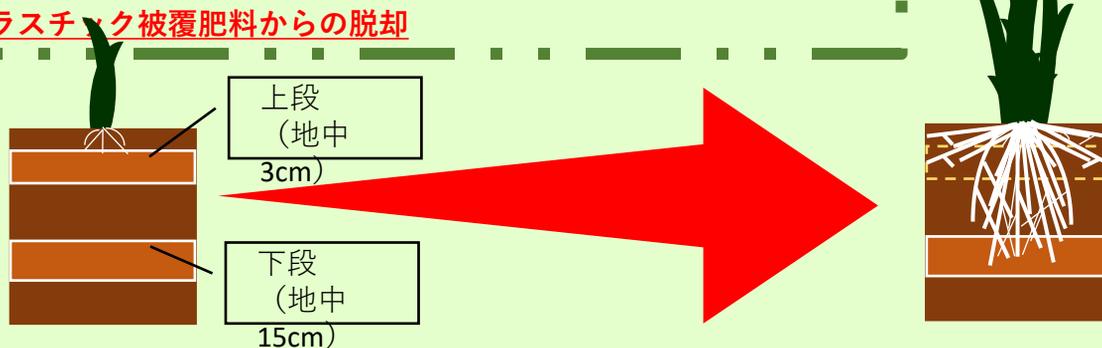
カグラモチ 5月田植え



2. 施肥体系(ペースト2段施肥)

ペースト肥料を2段に分けることで、慣行の基肥一発体系の肥効を実現する

プラスチック被覆肥料からの脱却



(単位:kg/10a)

肥料名	地区	上段(地中3cm)	下段(地中15cm)
ネオペースト SR502	内浦	16	24

土づくり

省力化のため、スタブルカルチでの秋耕を行う

3. 防除体系

基幹防除

用途		農薬名	使用時期	使用量
種子消毒		タフブロック	催芽時	200倍・24時間浸漬
育苗消毒				
苗箱施薬		スタウトダントツ箱粒剤08	田植当日	1kg/10a
		ブイゲットバリアード粒剤		
		ヨーバルトップ箱粒剤		
本田除草	※慣行コシヒカリに準じる			
畦畔除草				
仕上げ防除 (ドローン)	第1回	ピームエイトレボンゾル	出穂直前(収穫21日前まで)	5倍・800mL/10a
		バリダシンエアー		8倍・800mL/10a
	第2回	キラップフロアブル	出穂7～10日後(収穫14日前まで)	8倍・800mL/10a
	第3回	キラップフロアブル	出穂14～17日前(収穫14日前まで)	8倍・800mL/10a

随時防除【常発地では散布】

対象病害虫	農薬名	使用時期	使用量
紋枯病	モンセレン粉剤DL	出穂3～4週間前	3～4kg/10a
	モンガリット粒剤	出穂2～3週間前(散布後3～4日湛水)	3～4kg/10a

- 登録農薬以外は使用しない
- 安全使用基準の遵守
- 栽培履歴記録簿の記載
- 農薬使用時は必ずラベルを確認

4. 栽培の注意事項

1 播種量	播種量は 乾粃250～300g/箱		
	説明	密苗のため、播種量に注意してください。	
2 田植え時期	田植え時期は 5月		
	説明	田植え直後の植え傷み防止のため、天候の安定しない4月の田植えは止めましょう。	
3 栽植密度	栽植密度は 60株/坪以上		
	説明	能登地域は、初期生育が確保しにくいいため、栽植密度を増やすことでカバーしましょう。	
4 水管理	適期中干しの実施		
	説明	倒伏防止のため、必ず実施しましょう。	
5 病虫害防除	斑点米カメムシ に注意！		
	説明	大型で飛翔性のカメムシが増加しています。斑点米発生防止のため、出穂後2回の防除を行いましょう。	
6 収穫時期	収穫は 粃黄化率(80%以上) にて判断【高温登熟年の場合】		
	説明	群落の葉色で判断せず、ほ場内で粃の色を確認してから収穫しましょう。	
7 調製	調製網目幅は 1.85mm以上		
	説明	品質向上のため、調製網目幅は守りましょう。	
8 土づくり	スタブルカルチによる秋起こし を実施(10月中)		
	説明	収穫後気温が高いうちに秋起こしを実施し、稲わらの腐熟促進をしましょう。	



ペースト2段施肥



大型で飛翔性のクモヘリカメムシ



スタブルカルチによる秋起こし

グリーンな栽培暦(能登ひかり)

1. グリーンな栽培暦の特性

○特性概要

———慣行栽培との比較———

- ◆ペースト2段施肥技術の活用(高密度播種育苗栽培)
- ◆化学農薬の削減に向けた成分数の少ない農薬及び微生物防除剤等の活用
- ◆スタブルカルチを活用した秋起こしの省力化

○目標収量

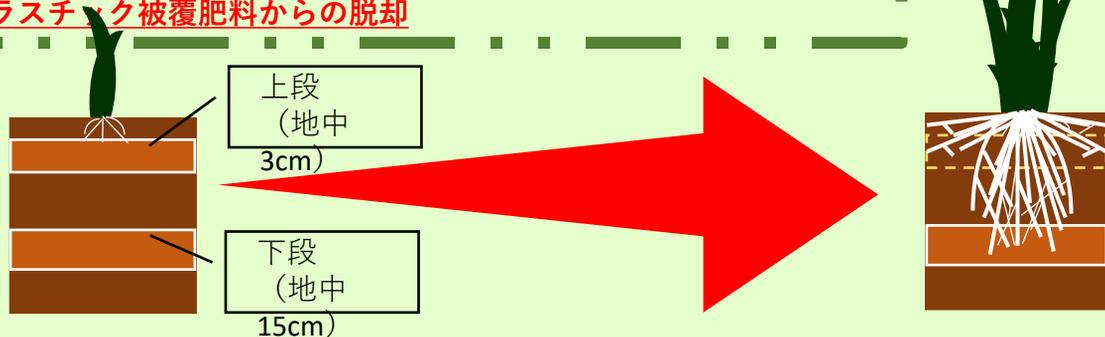
精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	総粒数 (粒/m ²)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)
540	380	75	28,000	85	22.5



2. 施肥体系(ペースト2段施肥)

ペースト肥料を2段に分けることで、慣行の基肥一発体系の肥効を実現する

プラスチック被覆肥料からの脱却



(単位:kg/10a)

肥料名	地区	上段(地中3cm)	下段(地中15cm)
ネオペースト SR502	内浦	20	30
	町野	20	30

土づくり

省力化のため、スタブルカルチでの秋耕を行う

3. 防除体系

基幹防除

用途	農薬名	使用時期	使用量
種子消毒	タフブロック	催芽時	200倍・24時間浸漬
育苗消毒			
苗箱施薬	スタウトダントツ箱粒剤08	田植当日	1kg/10a
	ブイゲットバリアード粒剤		
	ヨーバルトップ箱粒剤		
本田除草	※慣行コシヒカリに準じる		
畦畔除草			
仕上げ防除 (ドローン)	第1回	ビームエイトレボンゾル	5倍・800mL/10a
		バリダシンエアー	8倍・800mL/10a
	第2回	キラップフロアブル	8倍・800mL/10a
	第3回	キラップフロアブル	8倍・800mL/10a

随時防除【常発地では散布】

対象病虫害	農薬名	使用時期	使用量
紋枯病	モンセレン粉剤DL	出穂3~4週間前	3~4kg/10a
	モンガリット粒剤	出穂2~3週間前(散布後3~4日湛水)	3~4kg/10a

- 登録農薬以外は使用しない
- 安全使用基準の遵守
- 栽培履歴記録簿の記帳
- 農薬使用時は必ずラベルを確認

4. 栽培の注意事項

1 播種量	播種量は乾粃250~300g/箱		
	説明	密苗のため、播種量に注意してください。	
2 田植え時期	田植え時期は5月		
	説明	田植え直後の植え傷み防止のため、天候の安定しない4月の田植えは止めましょう。	
3 栽植密度	栽植密度は60株/坪以上		
	説明	能登地域は、初期生育が確保しにくいいため、栽植密度を増やすことでカバーしましょう。	
4 水管理	適期中干しの実施		
	説明	倒伏防止のため、必ず実施しましょう。	
5 病虫害防除	斑点米カメムシに注意！		
	説明	大型で飛翔性のカメムシが増加しています。斑点米発生防止のため、出穂後2回の防除を行いましょう。	
6 収穫時期	収穫は籾黄化率(80%以上)にて判断【高温登熟年の場合】		
	説明	群落の葉色で判断せず、ほ場内で籾の色を確認してから収穫しましょう。	
7 調製	調製網目幅は1.85mm以上		
	説明	品質向上のため、調製網目幅は守りましょう。	
8 土づくり	スタブルカルチによる秋起こしを実施(10月中)		
	説明	収穫後気温が高いうちに秋起こしを実施し、稲わらの腐熟促進をしましょう。	



ペースト2段施肥



大型で飛翔性のクモヘリカメムシ



スタブルカルチによる秋起こし